

柿生文化

平成21年6月29日  
川崎市立柿生中学校  
郷土史料館情報・研究誌  
第11号

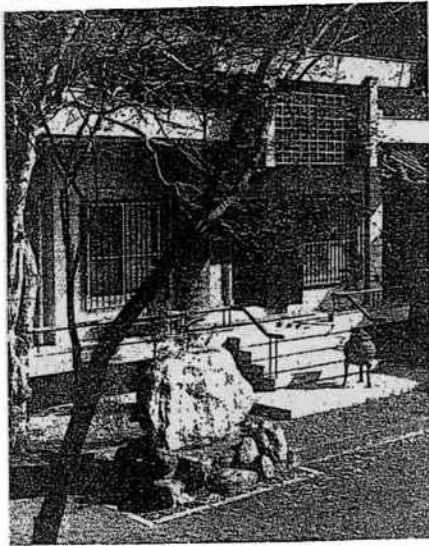
## 「文学の里」柿生を訪ねて

— 多くの歌人とのつながり —

校長 板倉 敏郎

よくご存じの方もいらっしゃると思いますが、柿生は、多くの文学者に愛されていたようです。今回は、柿生と歌人達とのつながりをご紹介します。

はじめに、北原白秋(きたはらびくしゅう)が昭和10年10月に妻の菊子さんを伴って初め



善正寺

て王禅寺を訪問しました。そして、昭和15年3月には、『多摩』の吟行会が行なわれ、「柿生」という長歌で「柿生ふる柿生の里、名のみかは禅寺丸柿、山柿の赤きを見れば、(中略)この柿の朱の豆柿、垣内にも庭にも外にも、道べにも丘にも野にも、照る玉と綴る山柿、柿生はよし」と詠じ「柿生ふる、柿生の里は、照る玉のつぶさに赤し秋年々に」「王禅寺今も老樹の本柿の朱なるからに御山」と反歌(長歌のあとに意味等を補足・要約するもの)を付けています。

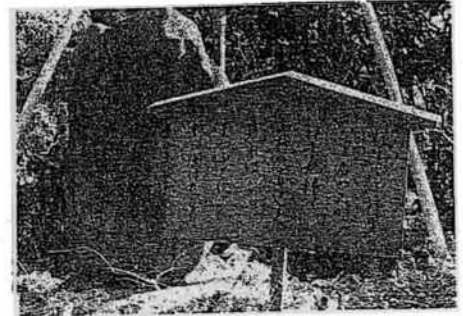
同じく王禅寺で荻原井泉水(おぎわら いせのすい)「思い出はいなげ土産の枝柿の甘かりしこと」を詠みました。また、片平の草木寺には若山牧水(わかやま ぼくすい)の歌「わが庭の竹の林の浅けれど降る雨見れば春は来にけり」や島崎藤村(しまざき とうむら)の「誰か舊(ふる)き生涯に安んぜむとするものぞおのがじし新しきを

・・・」また、片平の善正寺には、荻原井泉水(おぎわら いせのすい)の「手を合わせたまふ仏へ手を合わす」同じく善正寺墓地には、橋田東聲(はしだ とうせい)「おのづから吹き起こる風をさびしめり松の林にあゆみいりつつ」などの歌碑が残されています。

橋田東聲と善正寺の住職の望月氏との縁は深く、上記の歌碑は、今でこそ斜面に沿った墓地の近くにありますが当初は、もっと高い位置に置いてあったそうです。小学校建設用地造成のために山を削り、歌碑も今の所に引きおろしたそうです。東聲の遺骨の一部は、善正寺に納められているそうです。

一方、麻生区高石でも高浜虚子(たか浜 けいこ)をはじめ多くの歌人が歌を残しています。

このように、明治から昭和にかけて活躍した多くの歌人がこよなく柿生を愛した訳は、柿生の自然の姿にあったようです。文化の中心地である東京に近くこれだけの自然を残しているのはとても魅力的であったのではないのでしょうか。たしか、昔の柿生小学校校歌の歌詞は、荻原井泉水の作詞だったのでなかったかと思います。



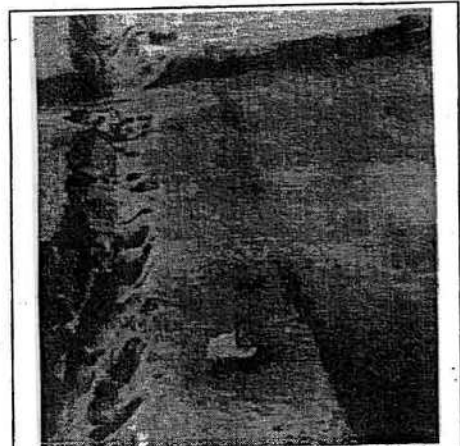
王禅寺 北原白秋歌碑

シリーズ 「柿生の歴史を探る」

第10話

## 石川牧 立野牧 —駒牽—

古代都筑の地はその名の通り、野山や谷が続く地形で放牧に適していました。この地方で詠まれたと思われる万葉集の東歌に、「柵越しに麦食む子馬のはつらつに相見し子らしあやに愛しも」があります。これは若い男女のロマンスを詠んだもので、「柵の向こうの子馬のように容姿はつらつの彼女、知り合ったばかりの娘だが愛おしくて



丘陵を分断する牧の柵跡(小山田遺跡)

たまらない」の意味で牧場の情景が微笑ましく伝わってまいります。時代を考察すると、早野や王禅寺の横穴古墳に見る馬の線刻画のその頃で、当時この様な叙情詩が作られたのかと驚かされてしまいます。

当時、馬が農耕に用いられる事は少なかったと思いますが、朝廷は軍団や貢ぎ物の輸送に馬が必要で、文武天皇の時代には「厩牧令」を公布し、次いで諸国に牧の制度を設けます。

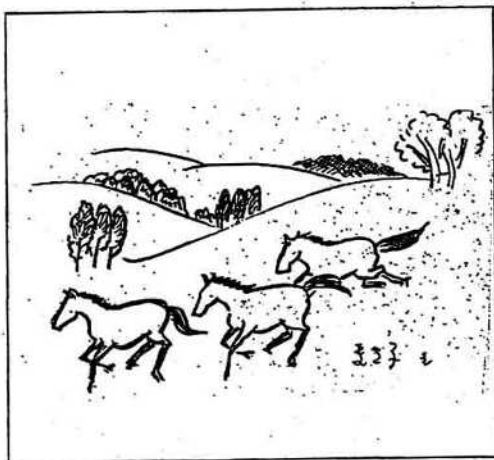
9～10世紀のその頃、都筑の地方には石川牧、立野牧の御牧がありました。御牧とは天皇家の勅旨牧で、当時の摂政藤原一族が管理していたそうです。石川牧は現青葉区荏田(石川)から麻生区

王禅寺に至る地域、立野牧は青葉区中山から恩田川流域の地域とされており、鴨志田～奈良には伊勢神宮の御厨房牧が、現稲城市から麻生区の金程・向原にかけては小野牧という私牧があったといえます。残念なことに1,000余年を経た現在、その全容を掴むことはできませんが、現宮前区には、有馬・馬絹の地名が石川牧の存在を証し、町田市野津田では、牧柵の遺構が発見され馬の育成が盛んであったことを証明しています。

毎年9月、石川牧や立野牧で育成された若駒(20頭ずつ)は、足柄峠を越えて都(平安京)へ牽かれて行きました。都では、「駒牽」といって諸国から駿馬を集めて華麗なパレードがあり、この「駒牽」には天皇も出座、都人にとっては楽しみな年中行事であったようです。

立野牧から駒を牽いてこのパレードに参加した立野牧の別当(管理者)藤原某の詠んだ歌「あき霧の立つ野の駒をひく時は心にのりて君ぞ恋しき」が当時の和歌集に残されているそうです。

ところが、天慶年間(931年～)になると、東国からの貢馬数は減少し、サボタージュが起こります。京の都で藤原貴族が駒牽きに興じる頃、遠い東国の牧では大きな変化が起こりつつあったのです。



文、小島一也氏

## 第12回 柿中カルチャーセミナーのご案内

◎日時 7月6日(月) 午後6時～

◎会場 柿生中学校 教室

◎講師 山田 仁和 氏(吾妻考古学研究所主任研究員)

◎テーマ「早野 上之原遺跡に見られる  
古代～中世 の柿生」

## 注目される複合遺跡と 柿生のロマンにふれる！

この度、吾妻考古学研究所主任研究員の山田仁和氏に講演をお願いし、現在、発掘調査が進められている麻生区早野にある戒翁寺横に位置する「早野上ノ原遺跡」の発掘調査の様子を報告していただくことになりました。この遺跡は、旧石器時代より江戸時代の長期にわたる複合遺跡で、現在、大変注目されている遺跡です。地中に眠る柿生の祖先の姿が彷彿として蘇るようなロマンあふれる貴重な遺跡です。どうか、たくさんの方々のご参加を期待しております。



(上ノ原遺跡を見学する柿生中生徒)

## 進む 郷土の史料を活用した 授業の研究

柿生中学校では、郷土史料館で収蔵される史料をもとにした授業の研究を社会科の教員を中心として行なっています。現在、明治初年の地租改正に関して、「地券」を史料として活用した授業、川崎の自由民権運動に関する授業、柿生周辺地域の学校教育に関する授業など現在使用している教科書をもとに郷土史料を活用しながらすすめる社会科授業の展開について研究を進めています。

しかしながら郷土に関する史料が非常に少なく、研究に支障をきたしております。是非とも地域の皆様のご協力を期待するところです。



(授業指導案の検討をする研究スタッフ)



— 英字新聞「フーイー・スト誌」がとらえた日本の姿 — [NO4]

## 幕末期の写真から拾う人々の生活

節季候 (せきぞろ)



紅勘 (べにかん)



左の写真「節季候」は、お盆や大晦日(おみそか)に、上のお面をかぶり紙の前垂れをつけコキリコをすり鳴らして「せきぞろめでたい」と縁起唄を囃(はや)して各家々を回って金銭をもらって歩いた。前掛けには「関揃(せきぞろ)」と書かれています。

右の写真「紅勘」は、各家々に回って、三味線や腰にさげた小鼓にあわせて祝い唄をおもしろく歌ってお金をもらってあるきました。お面を付ける場合もありました。

## 郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

22年に完成する本校の「郷土史料館」に収蔵する柿生・岡上に関する歴史的資料を探しています。ご自宅で保存されている史料(古文書や生活道具類)でお譲りいただけるものや、一時、お貸しいただけるものがございましたらお知らせください。しっかりとした管理体制で収蔵します。よろしく願いいたします。

今、地域の史料を探しています！  
協力してください！

## このような史料はありませんか

- ◎江戸時代の「検地帳」・「水帳」・「五人組帳」
- ◎地域の「絵地図」
- ◎江戸時代の「高札」(特に慶応4年の太政官布告「五榜の掲示」など)
- ◎江戸時代の寺子屋や私塾で使用した「教科書・往来物」
- ◎明治期発行の「地券」
- ◎明治・大正・昭和(戦前・戦中)の「国定教科書」
- ◎明治期の「自由民権運動」史料
- ◎その他各種史料

寄贈・寄託していただく史料がありましたらご一報ください。

柿生中学校 044-988-0004 黒川まで